

「教養セミナー」のあり方と 「21世紀の教養と教養教育」について

高田正義・青山健太・北田豊治・小林秀一・境田雅章・小出龍郎

1. はじめに

1) 初年次教育としての教養教育

大学における教養教育を考えるうえで、まず問題視されるのは「教養教育の位置づけ」である。日本における学士課程教育は、時代、社会など大学を取り巻く環境の急速な変化に対応する形で発展してきた。グローバル化する「知識基盤社会」や「学習社会」にあって、国民の進学需要は増加し、国際的通用性を備えた質の高い教育が求められている。中央教育審議会答申の中で具体的に求められている大学教育は、専攻分野についての専門性に特化した知識だけでなく、幅広い教養を身に付けることである。

近年、大学における初年次教育という言葉が改めて注目されている。初年次教育の抱える問題はこの数年で登場した課題ではなく、日本の大学における継続的な課題である。初年次教育が注目され出したのは、1991年の大学設置基準の大綱化の数年後である。大学設置基準の大綱化は、一般教育およびそれらを主に担当する教養組織（教養部、一般教育部等）の廃止を意味するものではなかった。しかし、多くの大学では教養部が廃止され、学部によって大学1年次から専門教育が開始されるようになっていった。また、一般教育（教養教育、外国語教育、保健体育）の単位数が削減され、その代わりとなる形で専門教育への単位数が増加され資格取得や就職対策を重視する偏重も見られるようになった。従来は教養部が大学1、2年次を対象に教養教育を行い、学習及び学生生活に順応した状態で学部に移行し専門教育への移行を達成していた。大学への導入教育、幅広い知識の修得の機会として機能していた一般教育が削減されたことにより、学部では新たな形で導入教育を実施する必要が生じた。多くの大学で「専

門基礎ゼミ」といった、演習型の少人数教育が実施されるようになったのである。導入教育として採用された演習型の少人数教育は、現在においても初年次教育の中核として「初年次セミナー」、「教養セミナー」といった名称で継続されている。このように、大学における初年次教育に着目したとき教養教育の果たす役割が大きいと言えよう。

2) 21世紀の教養と教養教育

大学における教養教育として、日本学術会議の提言「21世紀の教養と教養教育」では、「学問知」、「技法知」、「実践知」の修得を取り上げている。学問知は、学問、研究に留まることなく、自らの周辺や社会に関わる問題や課題に対して分析、検討、考察を行い解決していく知識のことである。技法知とは、メディアの活用、情報資料の整理や編集、数量的推論、本国語、外国語、文章作成能力、言語的・非言語的な表現能力、コミュニケーション能力などを構成する知識や技術である。実践知は、学問知、技法知として修得した知識、技術を日常の生活の中で実際に活用、発揮していく能力のことである¹⁾。

大学における初年次教育とは、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラムである。その目的は、高等学校や他大学からの円滑な移行、学習及び人格的な成長、大学での学問的、社会的な諸経験を成功させることなどが考えられる。学問や大学教育全般に対する「動機づけ」、「論理的思考」、「問題発見・解決」などは、初年次教育の重要課題であった。近年では、レポート・論文などの「文章技法」、コンピューターを用いた「情報処理や通信技法」、プレゼンテーションやディスカッションなどの「口頭発表の技法」、図書館の利用方法や「文献検索技法」などが重視されている。更に、学習した内容を実践に結びつけることを前提に「何ができるようになったか」が問われているのである。以上のように、初年次教育と言われる教育プログラムで取り上げられる課題は、教養教育を通して達成される課題であると言える。初年次教育としての教養教育では、社会に関わる問題発見・解決（学問知）、言語的・非言語的な表現やコミュニケーション（技法知）、修得した知識や技術を実践する能力（実践知）などを向上させることが必要であると考えられる。

3) 初年次教育のあり方

愛知学院大学教養部における教養セミナーは「学問の発見」という共通理念の下、授業内容には統一性がなく、各教員の専門性に一任されている。また、これ以上の具体的な目標や統一した主題に関しては、約8割の教員が不要であるとの意向を示している。各教員は独自の工夫の上、学生の知的好奇心に語りかけ、学習意欲を誘引し、授業の理解を助け、受動的な学習形態から能動的な学習形態へ導くことを狙っているのである。そのような学習形態の中で具体的

にどんな能力を取得させたいかといえば、「思考力、読解力、解析力、表現力、作文力」が挙げられる²⁾。この取得させたい能力に関していえば、前述の「21世紀の教養と教養教育」の内容と著しく類似していると考えられる。

この現実を総括すれば、初年時教育のあり方が自ずと見えてくる。初年次教育においては各教員の専門性を生かした学問を基礎とし（学問知）、学生に対して思考力、読解力、解析力、表現力、作文力（技法知）を身につけさせる。これらを習得した上で他の授業、および専門課程で実践する能力（実践知）を向上させていけば課題は達成できるといえるのではないだろうか。「学問知」に関しては、従来の教養セミナーで十分おこなわれているといえる。しかしながら「技法知」を取り入れる教養セミナーを、どのように展開すれば良いのか、また効果的なプログラムはどのように作成すれば良いのかが不明である。本学心身科学部健康科学科では、プレセミナーという初年次教育を実施している。その内容は、基礎的な「技法知」を向上させる内容となっている。そこで本研究は、プレセミナーを手本として「技法知」に特化した教養初年次教育プログラムを作成し（以下、モデル型群：付録参照）、従来型の教養セミナープログラム（以下、従来型群）と比較することで、「技法知」向上の可能性を探索することを目的とする。

2. 方法

1) 対象者

愛知学院大学1年次生における教養セミナー受講生を対象とした（180名）。

2) 日時

2015年1月13日～19日までの期間で行った。

3) 調査内容

愛知学院大学FD委員会で使用している学生アンケート（以下、授業評価アンケート）18項目に加え、高橋³⁾の研究を参考に19項目を加えた（以下、能力向上感テスト）。質問項目を精査し、最終的に両者合わせて35項目の質問紙を作成した。回答は、「そう思う：5点」「どちらかといえばそう思う：4点」「どちらともいえない：3点」「あまりそう思わない：2点」「そう思わない：1点」から一つを選択する5件法であった。

4) 調査計画

従来の教養セミナーを「従来型群」とした(92名)。これに対し「技法知」に特化したプログラムを新たに加えたものを「モデル型群」(88名)とした。これら2群における、授業評価と能力向上感の比較検討を行った。

5) 分析方法

本研究用に作成された質問しに対し、「従来型群」と「モデル型群」の平均値の差の検定をおこなった。統計処理には、IBM SPSS Statistics Ver.22を使用した。

3. 結果および考察

1) 授業評価について

(1) 単純集計による平均値比較

表1は、授業評価においてFD委員会で行われているアンケートの結果について、全体平均、学部平均、従来型群平均、モデル型群平均を記したものである。図1は、それらの平均をレーダーチャートに示したものである。データは、すべて平成26年度に実施されたアンケートによるものである。

これらの結果より、教養セミナーにおける学生の評価は比較的高い(3.4以上)ことが窺える。このことにより、教養セミナーが新入生に対し良好に評価されていることが示唆された。この結果に関しては、山名ら²⁾も同様な示唆を提示している。そして特筆すべきは、そのなかでもモデル型群が最も高い評価を得ているような傾向にあることである。プログラムを「技法知」に特化させたことから、なぜか授業評価も高くなっているのである。次に、これらの平均値を統計的に比較してみる。

「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」について

表1. 授業評価アンケート

	質問項目	全体	学部	従来型	モデル型
1	この授業をとって授業内容に興味を持つようになった。	4.0	3.9	3.9	4.1
2	授業に積極的に参加し、授業の活性化に貢献（手を挙げて発言、議論、作業など）した。	3.6	3.4	3.3	3.8
3	教員は熱心に授業を行った。	4.4	4.3	4.4	4.7
4	教員は授業内容をわかりやすく説明した。	4.1	4.2	4.3	4.5
5	教員の話し方は聞き取りやすかった。	4.2	4.3	4.3	4.7
6	教員は質問などに十分答えた。	4.2	4.2	4.1	4.5
7	教員は私語などに対して適切な授業環境をつくる努力をした。	4.3	4.2	4.2	4.3
8	授業の内容は理解しやすいものだった。	4.0	4.1	4.1	4.4
9	授業で出された課題（テーマ）は自らの理解を深めるような適切なものだった。	4.1	4.1	3.9	4.1
10	教員は講義概要（シラバス）の内容通り授業を進めた。	4.2	4.1	4.1	4.1
11	教員は授業の中で学生の積極的参加（手を挙げて発言、議論、作業など）をうながした。	4.0	3.9	4.0	4.1
12	教科書、教材、資料、板書、プロジェクター、AV機器などによって授業内容は分かりやすかった。	4.1	4.2	4.1	4.3
13	教員は授業の開始時間、終了時間を守った。	4.5	4.5	4.0	4.5
14	この授業を受けて知識や技能を高めることができたと思う。	4.2	4.1	4.0	4.3
15	この授業を受けてよかったと思う。	4.2	4.2	4.3	4.6
16	この授業を受けて、探求心、考察力等をもっとつけたいと思った。	4.1	4.0	3.9	4.3

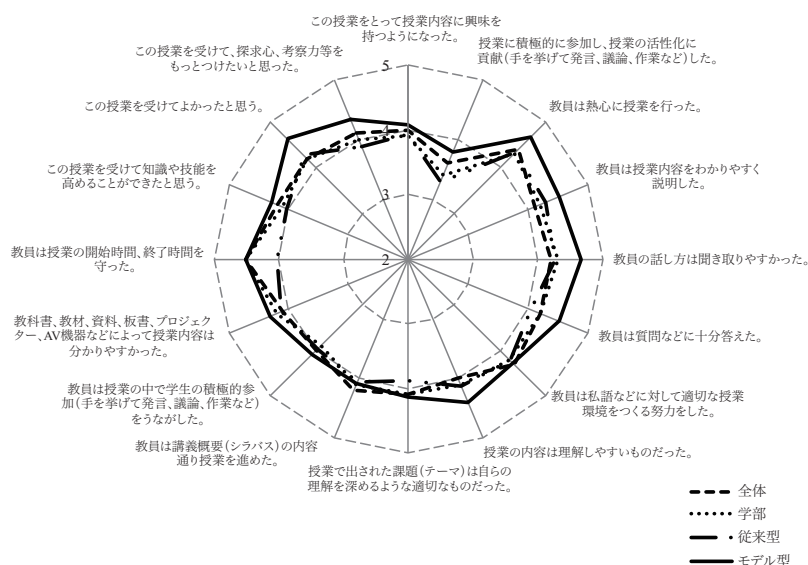


図1. 授業評価アンケート

(2) 平均値の差の検定

データが入手出来るものとしては、「従来型群」と「モデル型群」の2群であるため両者の平均値の差を比較した。その結果、両群間において、有意差を示さなかったのは9項目であった。その他の全項目において、有意差が検出された（表2）。

表2. 授業評価アンケートの平均の比較

質問項目		属性	度数	平均値	標準偏差	t	P
1	この授業をとって授業内容に興味を持つようになった。	従来	92	3.92	0.73	1.22	n.s.
		モデル	88	4.07	0.85		
2	授業に積極的に参加し、授業の活性化に貢献（手を挙げて発言、議論、作業など）した。	従来	92	3.28	1.01	3.37	**
		モデル	88	3.80	1.03		
3	教員は熱心に授業を行った。	従来	92	4.35	0.72	3.02	**
		モデル	87	4.67	0.69		
4	教員は授業内容をわかりやすく説明した。	従来	92	4.29	0.72	2.09	*
		モデル	88	4.51	0.68		
5	教員の話し方は聞き取りやすかった。	従来	92	4.26	0.75	3.73	***
		モデル	88	4.66	0.68		
6	教員は質問などに十分答えた。	従来	92	4.05	0.80	4.04	***
		モデル	88	4.51	0.71		
7	教員は私語などに対して適切な授業環境をつくる努力をした。	従来	92	4.21	0.72	0.58	n.s.
		モデル	88	4.27	0.81		
8	授業の内容は理解しやすいものだった。	従来	92	4.12	0.86	2.37	*
		モデル	88	4.40	0.70		
9	授業で出された課題（テーマ）は自らの理解を深めるような適切なものだった。	従来	92	3.88	0.84	2.13	*
		モデル	88	4.14	0.78		
10	教員は講義概要（シラバス）の内容通り授業を進めた。	従来	92	4.05	0.84	0.29	n.s.
		モデル	88	4.09	0.85		
11	教員は授業の中で学生の積極的参加（手を挙げて発言、議論、作業など）をうながした。	従来	92	3.98	0.88	0.87	n.s.
		モデル	88	4.09	0.85		
12	教科書、教材、資料、板書、プロジェクター、AV機器などによって授業内容は分かりやすかった。	従来	92	4.12	0.82	1.50	n.s.
		モデル	88	4.31	0.85		
13	教員は授業の開始時間、終了時間を守った。	従来	92	4.03	0.95	4.02	***
		モデル	88	4.52	0.66		
14	この授業を受けて知識や技能を高めることができたと思う。	従来	92	4.03	0.79	2.16	*
		モデル	88	4.28	0.77		
15	この授業を受けてよかったと思う。	従来	92	4.28	0.84	3.13	**
		モデル	88	4.63	0.61		
16	この授業を受けて、探求心、考察力等をもっとつけたいと思った。	従来	92	3.89	0.91	3.69	***
		モデル	88	4.34	0.71		

n.s. $p>1.0$, * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

「この授業をとって授業内容に興味を持つようになった」、「教員は私語などに対して適切な授業環境を作る努力をした」、「教員は講義概要（シラバス）の内容通り授業を進めた」、「教員は授業の中で学生の積極的参加（手を挙げて発言、議論、作業など）をうながした」、「教科書、教材、資料、板書、プロジェクター、AV 機器などによって授業内容は分かりやすかった」の5項目は、有意差を示さなかった。すなわち、これらの項目は両群において学生評価として同等であったことがわかる。既述のように概ね良好な回答していることから、教員態度としては「私語を注意するなど環境改善努力をし、資料などを使い分かりやすい講義を展開していた」、「シラバス通り授業を進め、学生の積極的な参加をうながした」というイメージになる。学生の反応としては「この授業を受講して、授業内容に興味を持った」ということになる。両者にとって、大変良好な回答であると推察される。

これに対し、その他の項目は全て「従来型群」に比較して「モデル型群」が有意に高い値を示した。なぜかという因果関係は、定かではない。しかしながら、「モデル型群」で展開される授業内容が「技法知」に特化したスキル教育であったことにより、分かり易さを生み出したと考えることができる。これは、学生に対しても教員に対しても言えることである。つまり、プログラム化された内容は、一回ごとの単元で「めあて」が決まっている。さらに、グラフ作成、レポート作成、プレゼンテーション資料作成など成果物と評価が毎回繰り返されるのである。従って、講義の方向が逸脱することなく進行していくのである。モデル型群の教員は共通目標を基礎とし、自らの専門性を生かした「学問知」を基本としたスキル教育によって、学生の興味を引き出したと考えることができる。さて、それでは本当にスキルの向上は達成できたのであろうか。

2) 能力向上感について

(1) 単純集計による平均値の比較

表3は、高橋³⁾の研究を参考に本研究用に作成した「能力向上感テスト」の結果である。また図2は、それらの平均をレーダーチャートに示したものである。

これらの結果より、従来型群も全て良好な評価（3以上）を示しており能力が向上している感覚は得ていることが示唆されている。ただし、顕著であるのは「卒業後の進路など自己実現について学習する機会があった」、「ワード、エクセル、パワーポイントなどの使用方法を理解できた」で大きく差が出ている点である。また、全体的にはモデル型群が従来型群を取り囲むような形態となった。記述した山名ら²⁾の研究によれば、「教養セミナーの担当教員が習得させたいとしていた『思考力、読解力、解析力、表現力、作文力』を学生が習得しているか否かは今回の調査結果ではわからない。」と報告している。今回の研究は、その一翼を担える可能

表3. 能力向上感テスト

	質問項目	従来型	モデル型
1	自ら調べて学習する機会があった。	4.1	4.5
2	卒業後の進路など自己実現について学習する機会があった。	3.4	4.1
3	ワード、エクセル、パワーポイントなどの使用方法を理解できた。	3.1	4.4
4	インターネットなどを活用し、適切な情報収集方法を理解できた。	3.9	4.5
5	収集した資料や情報の組み立て方、まとめ方を理解できた。	3.9	4.3
6	プレゼンテーションの方法を理解できた。	3.8	4.2
7	問題意識または問題点の分類と整理の方法を理解できた。	3.7	4.1
8	レポートの作成方法を理解できた。	3.8	4.3
9	情報発信、交換（コミュニケーション）能力が向上した。	3.9	4.0
10	物事に対する見方、考え方などの幅が広がった。	4.0	4.2
11	複数の意見をまとめたり、合意を得る能力が向上した。	3.7	4.1
12	レクリエーション（スポーツ種目など）において、協力して課題を達成することができた。	4.1	4.2
13	学習に対する考え方、能力、知識、技術が向上した。	3.9	4.2
14	教養セミナーで学習したことが他の授業や課題において活用することができた。	3.8	4.2
15	教養セミナーで学習したことは、来年度以降の専門科目の授業でも活用することができる。	3.8	4.3
16	教養セミナーを通して日常の学生生活を見直す機会となった。	3.8	4.2
17	教養セミナーを通して友人や仲間が増えた。	4.1	4.3
18	教養セミナーは今後も続けるべきだと思った。	4.0	4.4
19	来年度、教養セミナーⅢ、Ⅳを受講してみたいと思った。	3.7	3.9

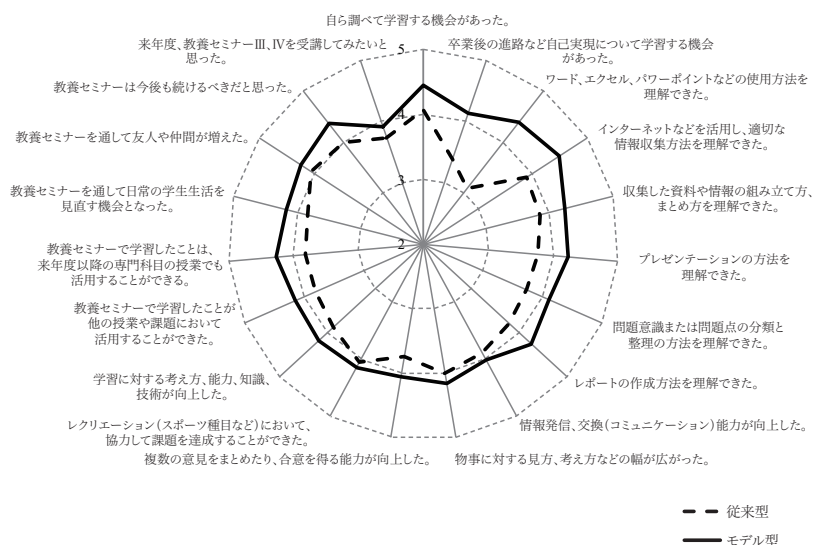


図2. 能力向上感テスト

性があると考えられる。

(2) 平均値の差の検定

表4は、能力向上感テストの平均の比較を示したものである。両群間において、有意差を示さなかったのは「情報発信、交換（コミュニケーション）能力が向上した」、「レクリエーション（スポーツ種目など）において、協力して課題を達成することができた」、「教養セミナーを通して友人や仲間が増えた」、「来年度、教養セミナーⅢ、Ⅳを受講してみたいと思った」の4項目であった。これらのことより、「レクリエーションで協力し合い、友人や仲間が増えた」といった、新入生が大学生活する上で必要な、人間関係の向上が教養セミナーによって担うことができる可能性が示された。また、「コミュニケーションの能力」の向上や「教養セミナーⅢ、Ⅳ」への興味も、プログラムに関係なく良好な評価をしていることが窺える。

その他の項目は、いずれも「従来型群」に比較して「モデル型群」が有意に高い値を示した。以上のことより、「モデル型群」は「従来型群」に比較して、能力向上感が高いことが示唆された。「技法知」の向上を目指したプログラムなので、このような結果を導き出すのは妥当であると言える。そして特筆すべき点は、「教養セミナーで学習したことが他の授業や課題において活用することができた」、「教養セミナーで学習したことは、来年度以降の専門科目でも活用することができる」、「教養セミナーを通して日常の学生生活を見直す機会となった」という項目で高い評価を得たことである。すなわち、「モデル型群」は「実践知」の向上が促進された傾向を示しているのである。学識や技術が身につけば、それを実践したくなるのは当然かもしれない。そういった意味では、学問を生かす方法として「技法知」が役立ったと推測できる。

表4. 能力向上感テストの平均の比較

質問項目		属性	度数	平均値	標準偏差	t	P
1	自ら調べて学習する機会があった。	従来	92	4.07	0.89	3.06	**
		モデル	88	4.45	0.82		
2	卒業後の進路など自己実現について学習する機会があった。	従来	92	3.39	0.89	5.63	***
		モデル	88	4.14	0.89		
3	ワード、エクセル、パワーポイントなどの使用方法を理解できた。	従来	92	3.10	1.24	8.43	***
		モデル	88	4.39	0.76		
4	インターネットなどを活用し、適切な情報収集方法を理解できた。	従来	91	3.89	0.98	4.81	***
		モデル	88	4.50	0.69		
5	収集した資料や情報の組み立て方、まとめ方を理解できた。	従来	92	3.86	0.81	3.37	**
		モデル	88	4.25	0.75		
6	プレゼンテーションの方法を理解できた。	従来	92	3.77	0.84	3.78	***
		モデル	88	4.24	0.82		
7	問題意識または問題点の分類と整理の方法を理解できた。	従来	92	3.73	0.81	3.13	**
		モデル	88	4.10	0.79		
8	レポートの作成方法を理解できた。	従来	92	3.79	0.98	3.39	**
		モデル	88	4.25	0.82		
9	情報発信、交換（コミュニケーション）能力が向上した。	従来	92	3.89	0.87	1.02	n.s.
		モデル	88	4.02	0.86		
10	物事に対する見方、考え方などの幅が広がった。	従来	91	4.01	0.82	1.22	n.s.
		モデル	88	4.16	0.80		
11	複数の意見をまとめたり、合意を得る能力が向上した。	従来	92	3.74	0.91	2.48	*
		モデル	88	4.07	0.87		
12	レクリエーション（スポーツ種目など）において、協力して課題を達成することができた。	従来	92	4.07	0.91	0.59	n.s.
		モデル	88	4.15	0.98		
13	学習に対する考え方、能力、知識、技術が向上した。	従来	92	3.88	0.80	2.52	*
		モデル	88	4.18	0.81		
14	教養セミナーで学習したことが他の授業や課題において活用することができた。	従来	92	3.82	0.84	2.60	*
		モデル	88	4.15	0.88		
15	教養セミナーで学習したことは、来年度以降の専門科目の授業でも活用することができる。	従来	92	3.82	0.71	3.79	***
		モデル	88	4.26	0.86		
16	教養セミナーを通して日常の学生生活を見直す機会となった。	従来	92	3.84	0.86	2.61	*
		モデル	88	4.17	0.86		
17	教養セミナーを通して友人や仲間が増えた。	従来	92	4.07	0.85	1.45	n.s.
		モデル	88	4.25	0.86		
18	教養セミナーは今後も続けるべきだと思った。	従来	92	4.00	0.84	3.04	**
		モデル	88	4.36	0.76		
19	来年度、教養セミナーⅢ、Ⅳを受講してみたいと思った。	従来	92	3.73	0.85	1.43	n.s.
		モデル	88	3.92	0.95		

n.s. $p>1.0$, * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

しかしながら、これらの結果は全てアンケートによる学生の主観的感覚を客観的な数値に表しているものである。したがって、本稿では能力が本当に向上したかどうかはわからないところに弱点がある。ただし、学生の中で確かに「何かが、できる」ようになった感覚が芽生えたことは、この結果から予測できるのではないだろうか。

(3) 授業満足感

満足感においては、満足項目を設けていないことから予測できる項目抽出して考察してみることとする。「この授業を受けてよかったと思う」、「教養セミナーは今後も続けるべきだと思う」という項目では、「モデル型群」の方が有意に高い値を示した。したがって、受講者の満足感は「モデル型群」の方が強いと考えられる。また、満足感の促進は能動的な学習によって得られることが予測できる。能動的な学習において関係の強い項目は、「授業に積極的に参加し、授業の活性化に貢献（手を挙げて発言、議論、作業など）した」、「この授業を受けて、探究心、考察力等をもっとつけたいと思った」、「自ら調べて学習する機会があった」であると考えられる。これらにおいても、「モデル型群」は有意に高い値を示したことから能動的な学習形態を導くことができる可能性が示唆されたといえよう。山名²⁾らによれば、教養セミナーの目的は、受動的な学習形態から能動的な学習形態へと導くことであるとしている。さらに、教養セミナーをより良いものにするために、様々な調査を行う必要があることを主張している。本研究は正に、これらの疑問に答える情報が含まれていると考えられる。

4. 結 論

本稿では、本学における初年次教育として位置づけられている「教養セミナー」（従来型群）に対し、「技法知」向上プログラムを加えた授業（モデル型群）に取り組んだ。その結果、以下の3点が示唆された。

1) 授業評価

「従来型群」も概ね高い評価を得ていたものの両群を比較すれば、「モデル型群」の方がより高い授業評価を得ている。

2) 能力向上感

全体的に「モデル型群」が有意に高い値を示した。全体的に「モデル型群」の受講者の方が、高い能力向上感を得ていた。

3) 授業満足感

能動的な授業形態への促進は、「モデル型群」の方が有意に高い値を示していると予測できる。したがって、「モデル型群」は能動的な授業への取り組みが行われやすいと考えられる。

「モデル型群」のプログラムは、学生の能力向上感を有意に増加させたことになる。「技法知」を向上させる目的として行う場合、教養セミナーの新たな方向性として今回のプログラムは一考の価値があるといえよう。

5. 今後の課題

能動的な授業形態を導き出すには、授業における満足感が重要であると予測できる。本稿では、授業形態と満足感の因果関係を読み取ることができなかった。能動的な授業を展開するために、今後は授業満足感項目の抽出と、授業の満足感が何によって生み出されているのかを明確化する必要があるだろう。

参考、引用文献

- 1) 日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会、21世紀の教養と教養教育、P26.
- 2) 山名賢治、前山眞太郎、近年の教養セミナーⅠ・Ⅱ、愛知学院大学教養部紀要、52-2、2004、P45-63.
- 3) 高橋正克、長崎大学教養セミナー ―初年次教育としての役割と評価の検証―、長崎大学 大学教育機能開発センター紀要、4、2013、P39-58.

付録：「モデル型群」プログラム

春学期			秋学期		
回	テーマ	内容	回	テーマ	内容
1	イントロダクション&共通項探しゲーム	アイスブレイキング	1	イントロダクション&コンセンサスゲーム	「議論」と「同意」
2	パワーポイントで自己紹介「プレゼンの作成」	パワーポイントの使い方、インターネットからの情報収集・編集、プレゼンテーション作成	2	コンセンサスゲーム解説	
3	パワーポイントで自己紹介「プレゼンの作成」		3	(1)グループ発表について	「事実」と「事実背景」
4	レクリエーション	体験学習プログラム（「努力」と「協力」）	4	(2)テーマの選定・意思決定（マインドマップ、KJ法など）	「ブレンストーミング」と「意思決定」
5	自己紹介プレゼンの発表	プレゼンテーションの実際（3分間）	5	(3)資料の収集（インターネットなど）	情報収集による「事実」と「事実関係」の吟味
6	自己紹介プレゼンの発表		6	(4)調査内容の選定	
7	エクセルでグラフ作成	グラフ作成・選択	7	(5)質問紙作成	「2件法、3件法、多肢選択法、評定法、順位法」等の決定
8	ワードでレポート作成	レポート作成、グラフの貼付・解説	8	(6)調査実施&集計	「集計」と「統計処理」
9	研究発表の How to	命題に対する結論への導き方	9	小論文の書き方	「三段論法、弁証法」の理解と実践
10	研究発表の作成	「働く」意義、就職活動、希望する職種、達成可能性、就労条件、年収、生きがいの探求	10	小論文の作成	
11	研究発表の作成		11	小論文の評価	
12	研究発表の作成		12	プレゼン準備	「論理的」に表現し、「説明」する技術
13	レクリエーション	体験学習プログラム（「過程」と「結果」）	13	プレゼン準備	
14	発表会	プレゼンテーションの実際（5分間）	14	発表会	プレゼンテーションの実際（7分間）
15	発表会		15	発表会	